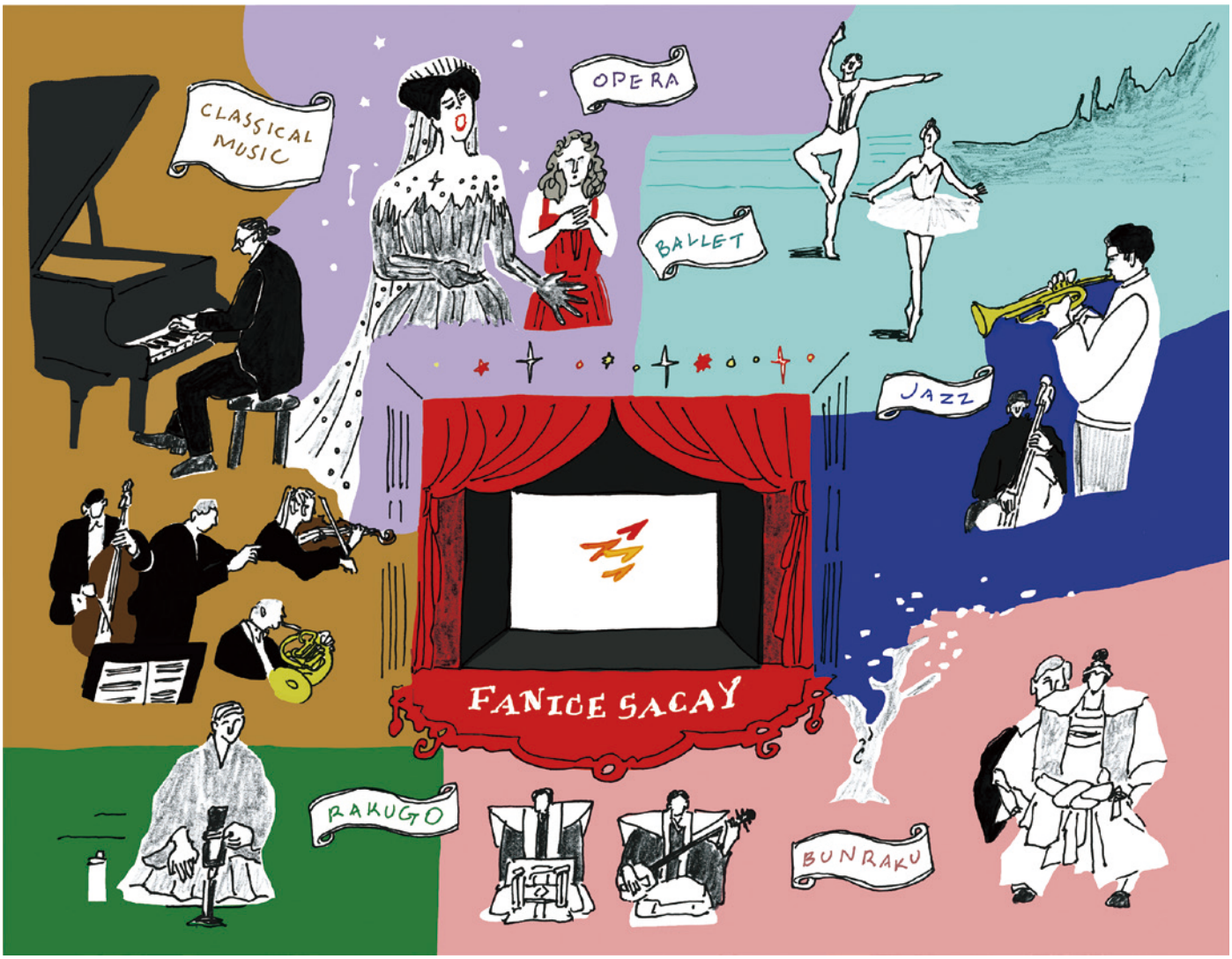
めくるめく、劇場体験。

フェニーチェ堺

FENICE SACAY



©一色 美奈保

巻頭特集

クロスオーバー対談「オープンマインドでいこう！」

小曽根真 × 中川和彦

ジャズピアニスト　スタンダードブックストア

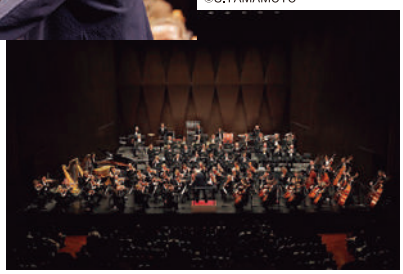
観覧エッセイ 髙村薫（直木賞作家）「ロンドン交響楽団 日本ツアー 2022」

2023
vol.21

ペンと劇場

サー・サイモンラトル指揮 ロンドン交響楽団 日本ツアー 2022 10月1日公演

©S.YAMAMOTO



直木賞作家 髙村薫

南大阪の普段着の町、堺市に国内トップクラスの音響効果を誇る奇跡のような音楽ホール、フェニーチェ堺がある。そこで世界屈指のオーケストラ、ロンドン交響楽団が日本の観客のためにたっぷり2時間、ベルリオーズ、武満徹、ラヴェル、シベリウス、バルトークを演奏する———そう聞いただけで、クラシックファンなら涎が出るだろう。音楽監督サー・サイモン・ラトルならではのモダンで意欲的なプログラムは、2年越しとなる日本公演に向けた意気込みがうかがえ、しかも4管編成に近いフルオーケストラを率いての来日である。大阪で、こんな贅沢な公演に巡り合う機会はそうそうあるものではない。

開演前のオーケストラには音合わせ一つとってもそれぞれの流儀があるが、ロンドン交響楽団は団員がみな実にマイペースで楽しげで、80人近い団員がそれぞれ自分の楽器の指慣らしに余念がない。それだけで早くもホールをゆるがすほどの大音響の雲がわきだし、客席もいまかいまかと胸が高鳴ってゆく。

さあ、一分一秒でも早く音楽を！　まるで全身でそう告げているような、颯爽としたサー・サイモン・ラトルの登場である。何も溜めない、何も待たない、とにかく最高の音楽を！　指揮台に立ってかざした右手の指揮棒と左手が小さな弧を描いた次の瞬間、ベルリオーズの有名な序曲『海賊』の、アレグロ・アッサイの細かく刻まれた無窮動※注のメロディが走り出す。そこに微妙にずれながら管楽器が飛び跳ねるように重なってきて、のっけから極彩色の音のタペストリーが繰り広げられる。続くアダージョの抒情的な情景描写でも前へ前へと伸びてゆく弦楽の音の分厚さが際立ち、この自信に満ちた揺るぎなさこそが粒よりの響きの素だと、早くも確信させられた。

続く武満徹のトロンボーン協奏曲『ファンタズマ・カントスⅡ』は、上質な管楽器群をもつロンドン交響楽団にふさわしい選曲だったと思う。一にも二にも映像詩的な武満の音の空間で柔らかにたゆたうトロンボーンの歌に耳を傾ける間、複雑に重ねられたどのパートの音も埋もれないアンサンブルの見事さのおかげで、これまで気づかなかった音も聞こえてきて、私には終始、新鮮な驚きに満ちた夢の時間となった。

ラヴェルの『ラ・ヴァルス』とシベリウスの『交響曲第7番ハ長調』は、どちらもこの交響楽団のもつ音の厚みと、サー・ラトルによる緻密で精巧な構成がぴったり合わさり、気がつけば息をするのも忘れているほどだった。たとえば『ラ・ヴァルス』は、絵画に例えれば複雑な色がざわめきあうルノワールだろうか。1拍と2拍で急速にぶわんと膨らみ、3拍目にはまた一気にピアニッシモに戻るウィンナワルツの3拍子が幾層にも重なりあい滲(にじ)みあい、ときに仄暗(ほのぐら)く、ときに明るい輝きを放つ。こんなにスイングする『ラ・ヴァルス』は初めて聴いた。

一方、シベリウスの『交響曲第7番ハ長調』が誘うのは深々とした静寂である。単一楽章のなかにトロンボーンの奏でる主題があり、緩急も転調もあり、曲想は次々に変化してゆくが、ここでも弦楽の圧倒的な伸びやかさ、管楽器の神々しい柔らかさに、しばし息をするのを忘れていた。

そしてバルトークのバレエ組曲『中国の不思議な役人』。このアクロバティックで色彩豊かな曲は、オーケストラの能力の高さと、指揮者の精緻な曲の組み立てが最高に生きる当夜の白眉(はくび)だった。狂乱の物語が目に浮かぶほどの映像的な音の魔術は、圧巻の輝きと色彩を放ってホールを覆いつくし、アンコールのフォーレの『パヴァーヌ』を含めてその場をいつの間にか音楽の喜びですっぽり包み込んでいた。聴衆はもちろん、サー・ラトルも団員たちもみな歓喜の表情だったのが実に印象的だった。ああ、元気が出た！

※注　パガニーニの「無窮動 op. 11」など、クラシックでは常動曲とも呼ばれる、コード進行にそった音符で埋めつくされた休符のないフレーズ・エクササイズのこと。

土の記（上）

髙村薫 作　新潮社　本体1,650円（税込）　好評発売中

青葉アルコールと青葉アルデヒド、テルペン系化合物の混じった稲の匂いが鼻腔で膨らむ。関西の一流メーカーに就職して妻の里に身を落着けた男は、今年の光合成の成果を測っていた。妻の不貞と死の謎、村人への違和感を飼い馴らしつつ、緑したたる田園で老いてゆく男。そして晩夏の土石流。ラスト数瞬が目を奪う……。野間文芸賞、大佛次郎賞、毎日芸術賞、とその年の文学賞を総なめにした髙村文学の金字塔。

髙村薫（たかむら・かおる）
1953（昭和28）年、大阪市生まれ。作家。1990年『黄金を抱いて翔べ』でデビュー。1993年『マークスの山』で直木賞受賞。著書に『晴子情歌』『新リア王』『太陽を曳く馬』『空海』『我らが少女A』など。ミステリと純文学の垣根を超え、精力的に新しい小説に挑戦し続ける。毎日出版文化賞、親鸞賞、読売文学賞、野間文芸賞、大佛次郎賞、毎日芸術賞などを受賞。

ペンと劇場：著名な作家がフェニーチェ堺に足を運び、実際に主催公演を観覧して書いたエッセイです。

巻頭特集

「オープンマインドでいこう!」

小曽根真 ジャズピアニスト × 中川和彦 スタンダードブックストア

1961年生まれの2人による クロスオーバー対談

『知らない世界にいくのは怖いが、そこで“できない自分”をみつけるのがすごく好きなんです。知りたい、とこっちがオープンになっていけば、難しいことは実はなくなっていく気がして。難しいことに出会えば出会うほど、出会いが喜びになっていく。これからも、知らないこととの出会いを喜べる自分でいたい』

ジャズピアニスト 小曽根真

『僕は本屋ですが読書家でもなんでもなくて、親父が死んだから跡を継いだだけ。実は今でも、どこかでコンプレックスがあります。でもひょっとすると、読書家で書店に親しんだ人間ではなかったから、本屋で雑誌の立ち読みくらいしかしてこなかったから、一風変わったこんな本屋があってもいい、と思えたのかな』

スタンダードブックストア　中川和彦

中川　小曽根さんは早生まれだから学年が違うんですが、実は僕も同じ1961年生まれ。若い頃から世界で活躍する小曽根さんは雲の上の存在ですが、今日は開き直ってお話を聞きたいと思います。

小曽根　いやいや(笑)。やっていた音楽がジャズだったのが大きいですよね。そして海外に出ていける時代に僕らは生まれてきた。ジャズのマーケットのメインが実は海外にあるので、そこで活動することが普通というか、他のジャンルの音楽と比べて入っていきやすかったのかもしれません。親父(※1)の世代には戦争があって、どれだけジャズに恋焦がれていようと『本場アメリカに行く!』なんて、できませんでしたから。

中川　この2月にフェニーチェ堺で公演を行う小曽根さんのビッグ・バンド「No Name Horses(以下NNH)」ですが。

小曽根　このバンドには一騎当千の音楽家が集まっている。でも“サラブレッド”というのは嫌だったんですよ。なぜならサラブレッドには飼い主がいて、飼い馬には名前が付く。飼い主のいない、自由に走り回るとんでもないミュージシャンたちにふさわしい名前を妻の神野三鈴(女優)が思い付き、説明を聞いたメンバー全員が「かっこいい!」となってバンド名が決まりました。

中川　全員がそれぞれの楽器で日本トップクラスの奏者、というメンバーを率いていくのは大変では?

小曽根　よくリーダーをやっていられるね、と心配してくれる方もいます(笑)。でもみんな一流だから、僕がアレンジ(した曲)を持っていってもリハーサルでほとんど指示をしたことがない。吹いたら、わかり合えるんですよ。「これやろ?」って。1回譜面を通して吹いてみて、2回目、3回目になったらどんどん曲がシェープアップして行く。どうしてもみんなが迷っているときは「ここはこんな気持ちやで」ということはたまにあるけど、それはおそらく彼らがやったことのない音楽を僕が書いているから。

中川　NNHはみなさん一流だからおまかせできるんだろうけど、小曽根さんが持っている場というか、雰囲気の力があればこそできる部分もあるんじゃないですか? なにをやっても小曽根さんとNNHの音楽になっていく安心感が、たぶんあるんだと思います。僕の話になりますが、新しい店をつくったときにとても優秀なスタッフがやってきたんです。有名店に勤めていた人間で、『この店は彼にまかせとったらええ』と思いました。その彼が僕のところにきて、「すみません、どんな品揃えをしたらスタンダードブックストアになるんですか?」と。「いやいや、君が好きな本を入れたら勝手になるから」と、答えました。うちの店に品揃えのルールがあるとしたら『自分たちが好きな本を入れる』、それだけなんです。でも「好きなようにやれ」なんて、そんなのいわれたことがないんですよね。「えっ?」という表情になりましたが、もともと優れた男だったから、しばらくするうちにちゃんとスタンダードブックストアの品揃えになっていきました。

小曽根　いいですね! 聞けば聞くほどお店に行ってみたくなる。ワクワクします!

中川　僕がやっているのは、ある程度アドリブというか、とがったことをやってもまあまあ許してもらえるだろうという、なにをやっても安心な場づくりで。従業員のパフォーマンスを最大限に発揮してもらえるように考えていたんですね。

小曽根　作曲中は自分のなかに色んな音が鳴っています。それに対して、メンバーからは違うものが返ってくることがある。それを喜びとするか、「いや、そうではない」と、あくまで自分に聴こえている音だけに固執するのか。デューク・エリントン楽団(※2)は、当時のアメリカの第一線のミュージシャンばかりが集まっていました。必ずしもみんなが譜面に強いわけではないので、間違えて吹くこともある。それをリーダーのエリントンが聴いて、「ごめん、その音。そっちでいこう」となることがよくあった。それくらい、音楽というのは“出た音”が真実なんです。それしかない。その音から次の音につないでいくのも、僕のやり方。アメリカでやっているときに教わりました。人の力を借りることの大きさというか、色んな人のアイデアやクリエイティビティを選べる幸せが、リーダーにはある。自分ひとりでやっても、たかだかしれているんです。

中川　小曽根さんくらいの人がそんなことをおっしゃるなんて、なんだか感動します。

小曽根　いや、本当ですよ。マニュアルがあって「このとおりやれ」といったらできるのは当たり前だけど、そうではなくて。どう工夫したらもっと面白くなるのか、こうしてみたらやりやすくなるんじゃないか。そういうクリエイティビティというのは、やるなかでおそらく失敗もあるでしょうが、それにもまた価値がある。

中川　小曽根さんの今までの発言や活動を見ていて感じることがあるのですが、若い人を育てるということについて、どうお考えですか? NNHでもロックのギタリストを起用したことがありましたよね。

小曽根　ジャズのジャの字も知らない、どころかジャズなんて鼻にもひっかけない。それでいてギターを弾かせたら圧倒的な演奏をする。そんなギタリストとやってみたくなっちゃって(笑)。あるギタリストとドラマチックな出会いがあって一緒にツアーを回ることになったんですが、残念ながらコロナ禍であまり活動はできませんでした。どちらかというと、若い人にチャンスを与えるよりもエネルギーをもらっているという感覚ですね。

中川　小曽根さんのそういう“開かれた”考え方に、すごく共感します。そうやって垣根を越えていくことは、とても大切なことだと思います。

小曽根　国立音楽大学で何年かジャズを教えていましたが、今の子は失敗することをものすごく怖がります。『もっと失敗しないと!』と思うんだけど、アンサンブルでも教えていると上手な子はまとめてくるんです。そうしたら、僕の機嫌が悪くなる(笑)。20歳や21歳でそんなまとまった演奏をするなんて全然面白くない、って。学生たちはなぜ怒られるかわからない。2年生や3年生になると、僕の顔色を見て黒い雲が湧き上がってくるのがわかるようになって、あわてて演奏を壊しにかかります(笑)。

中川　“当たり前”からはみ出してみる。大事なことですね。

小曽根　学校やリハーサルの場は恥をかくところ。特に大学は社会との橋渡しの場所です。教えたとおりに弾くなんてつまらないことはしなくていいから、とにかくここで思い切り暴れて、思い切り“ヘタクソ”を出してみなさい、と。3年生くらいで、みんな挫折する寸前までいくんですよ。自分には考える力がない。クリエイトする力がない。それは今までやったことがないからなんですが、壁に直面して『自分には無理だ』となっていく。けれど、そこを乗り越えると4年生になって突然バーンと変化が始まって、卒業する頃には自分の音楽を書いて、こっちの心を打つものが、“原石”が姿を現すんです。

中川　わかる気がします。学生のフリーペーパー制作を競うイベントをしたことがあるのですが、みんなめちゃくちゃ上手いんですよ。イベントの制作物なのに、自分たちで広告を取ってくるケースまであったり。すごいなあ、きれいに作ってくるなあと思うんですが、その反面、「まあ…、別に…、そうやんな…」みたいな、どこかで見たことのあるようなものが多くて。『これをやっていれば確かに間違いはない』よりも、「うわー、なにこれ!」と目を丸くしたり、「アホちゃうか!(喜)」と称賛したくなるようなものがない。せっかくなんだから振り切ってみればいいのに。小曽根さんの生徒たちは幸せですね。

小曽根　考えてみると、自分も先輩の音楽家に同じように導いてもらっているんです。ゲイリー・バートンしかり、チック・コリアしかり。僕は学生の頃にいわゆるレジェンドと呼ばれる人たちとギリギリ一緒に演奏するチャンスをいただいた年代で、ツアーに呼ばれたりと、かわいがってもらいました。彼らは若者のエネルギーから自分もちゃんともらうものがあることを知っており、それを信じてリスペクトしているんです。だから僕も若い子たちを育てるんじゃなくて、エネルギーを吸い取ってやろうとしているくらい(笑)。逆にこちらがワクワクしています。

(※1):小曽根実=小曽根真の父。
神戸出身のジャズピアニスト/ハモンドオルガン奏者。

(※2):スウィング・ジャズを代表するアメリカの人気バンド。
数多のヒット曲を送り出し、音楽シーンに大きな影響を与えた。

続きは P.10へ

JAZZ

JAZZ 大ホール

小曽根真 featuring No Name Horses ～THE BEST～

2月10日(金) 開演19:00

小曽根真がリーダーをつとめ、それぞれの楽器で日本を代表するトップミュージシャンが集結したビッグバンド、No Name Horses。
初のベスト盤リリース&全国ツアー決定!
15年以上の年月を経て創り出された名曲の数々から
最高のナンバーをセレクト、熱いステージをお届けします!

©Ryota Mori

好評発売中
S席6,000円　A席5,000円　B席3,500円　C席2,000円　主催:フェニーチェ堺

W S び 223-230 口 54997 e ★

W S び 口 e ★ については裏表紙をご覧ください

●最新の公演情報はフェニーチェ堺HPをご覧ください　●都合により、曲目・公演内容が変更になる場合がございます　●掲載情報は1月10日現在

チケットを購入する

特集後編

中川　そんな小曽根さんの失敗談を教えてください。

小曽根　もっとも思い出したくない!（笑）あれは25歳の頃。アメリカで世界デビューして、日本凱旋公演で成田空港にまでTVカメラが来てニュースになったくらいの時期だから、そりゃあイイ気になりますよね。その頃の話です。当時の僕のボストンのマネージャーがすごく力のある人だったんですが、「マコト、ドイツのベルリンでバッハのコンサートがあるぞ」と。バッハなんて弾けないから、と断ったのに、「バッハは即興の天才でもあった。向こうも即興をやってほしいといっている」ということで、それならばと引き受けました。そもそも僕は、クラシックなんて嫌いだと公言していたんです。何百年か前に誰かが書いたものをいまさら弾いてなにが楽しいの、なんて本当にひどいことをいっていた。で、次の日の朝に先方のプロモーターさんやディレクターさんと話をしてみたら、「バッハはなにを弾きますか?」。バッハは弾きませんよ、僕は即興をやれといわれて来ているので、と返すと、「バッハのフェスティバルなんだから、バッハを演奏してもらわなければ話にならない」と。中学校のときの練習曲くらいしか弾けませんと答えたら、「それでいい、その曲に基づく即興をやってくれ」となったんです。わかりましたといって、それから楽器屋さんが開店するまで待って楽譜を買いに行き、夜までずっとその曲を練習しました。でもさらえばさらうほど、一ヶ所でも間違うと撃たれるんじゃないかと思うくらい緊張してきて。だってドイツでしょ、バッハでしょ!（笑）しかも、僕以外はみんなバッハの専門家! それでとうとう本番になって。その曲は技術的には難しくないはずなのに、なんと指が動かない。ピアノの前に座ってお客さんも待っているのに、指が下りていかない。ゆっくり弾こうと思い直したら、弾き始めて4秒くらいでひとつ間違えて、そこからどんどん頭が真っ白になっていきました。その状態で1分くらい弾いた後に即興をしたんだけど、みんな我慢して聴いてくれていたんでしょうね。よくブーイングが起きなかったと思いますが、もうそんな気にならないくらいにひどかったんでしょう。即興演奏はお客さんもワーッと拍手してくれたんです。でも、ヨーロッパ全土に最初の5分が放送されて。翌年、ヨーロッパの仕事がドーンと減りました（笑）。

中川　あー。

小曽根　例のマネージャーに「今年はヨーロッパからオファーはないのかな」と聞いたら、「あのバッハの演奏を観た人から結構色んなコメントをもらっているよ」といわれて。だから、そのブッキングをしたのはあなたでしょ、と（笑）。でも、弾けなかった自分が悪いんですよね。簡単な曲ですし。それを自分でアレンジして演奏してしまうのが、どうしても嫌だったんです。それではバッハの曲を弾いたことにならないので。僕自身が作曲をするだけに、ちゃんと曲と向き合わずに安易なアレンジをすることが許せなかった。自分に嘘をつきたくなかったんでしょうね。

中川　この対談が決まってからあらためて小曽根さんが演奏する映像を何本か観たんですが、こんなに楽しそうに弾いているミュージシャンだったんだ、と再認識しました。若い人からいつも刺激を受けているからなんですね。

小曽根　とにかく音楽が好きで、ピアノを弾いて喜んでくれる人の顔が見たいんです。お客さんもそうだし、演奏者もそう。たとえば一緒に演奏するのがオーケストラだったら、僕が弾いたときに顔を見てみると、みんなニヤッとするんです。『あなた、そんな音を弾くの?』みたいな。ありえないような音を出してみて、ちょっと笑わせてみたり。音楽って言語なので、交わせば交わすほど、どんどんエネルギーが回っていくんです。スパイラルに。あんなにもコンサートを続けてきつくないの?といわれますが、むしろ元気になります。しかもお客さんからの言葉には拍手という音があって、それはそれはすごいエネルギーなんです。あんな栄養剤はないですよ!あの音は本当にありがたいですし、お客さんも正直で、演奏が予想外の方向に進んでも拍手は拍手でちゃんと返ってくる。コミュニケーションなんです。こんな良質なコミュニケーションが続けられているかぎり、ずっと元気をいただいているんじゃないかな。

中川　今日お会いしてみて、すっかり小曽根さんの虜になってしまいました。（カバンからそーっとCDを数枚取り出し）すみません、厚かましいお願いですがサインをいただいてもいいですか?

小曽根　もちろん! 僕も中川さんの本屋に行きますね!

小曽根 真 プロフィール

1983年バークリー音大を首席で卒業。同年米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び、全世界デビュー。2003年グラミー賞ノミネート。

パキート・デリヴェラ、ゲイリー・バートン、ブランフォード・マルサリスなど世界的なプレイヤーとの共演や、ビッグ・バンドの活動など、ジャズの最前線で活躍。また、NYフィル、サンフランシスコ響、NDRエルプフィルハーモニー管弦楽団など国内外のオーケストラとも共演を重ねる。2016年にはチック・コリアとNHK交響楽団定期演奏会に出演、また日本各地でデュオ公演を展開。2021年には還暦を迎え、「OZONE60」と題したプロジェクトを全国47都道府県で催行し成功を収めた。

現在、「From OZONE till Dawn」と題した若手音楽家の育成プロジェクトにも取り組み、後進の育成にも努めている。平成30年度紫綬褒章受章。

中川和彦 プロフィール

2006年スタンダードブックストア心斎橋をオープン。「本屋ですが、ベストセラーはおいてません。」をキャッチフレーズに、自分たちが面白いと思った書籍と関連雑貨を並べるスタイルで書店経営に新風を吹かせる。併設のカフェで本の試し読みができることもあいまって、関西の“アンテナ感度の高い人たち”の耳目を集める。2019年に閉店し、2020年から天王寺に場所を移して再開。新店舗の内装作りにクラウドファンディングを行ったり作家とのイベントを多数開催するなど、独自の路線でお客様との関係性を築いている。

W S ぴ ロ e ★ については裏表紙をご覧ください

●最新の公演情報はフェニーチェ堺HPをご覧ください　●都合により、曲目・公演内容が変更になる場合がございます　●掲載情報は1月10日現在

チケットを購入する

堺緞通

さかい　だん　つう

織

ふれる堺。

緞通とは？

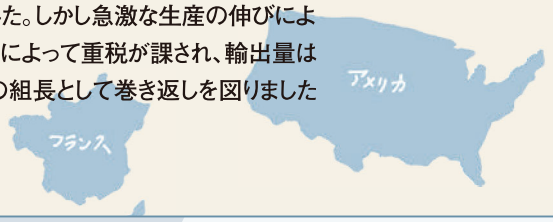
中近東から中国を経て日本に伝来した手織りの絨毯を「緞通」と言います。「だんつう」の語源は、中国語の「毯（たぁん）子（づぅ）」と言われ、その音を模したものとされています。日本では、元禄年間（1688～1704）に肥前佐賀藩で、古賀清右衛門が外国人に技術を学び鍋島緞通の生産が始まりました。江戸後期には、泉州堺、播州赤穂でも緞通が生産されるようになり、明治期の西洋化の波に乗り、瞬く間に一大産業へと発展しました。

堺緞通の誕生と転機

堺の手織り緞通は、天保2年（1831）堺車之町で真田紐の製造をしていた糸物商の糸屋（藤本）庄左衛門が、「鍋島緞通」と「中国製の敷物」を参考に泉利兵衛に織らせ、販売したのが始まりとされています。

明治10年（1877）、庄左衛門の孫の荘太郎が明治天皇の堺行幸[注1]の際、行宮（あんぐう）[注2]に「手織り緞通」を献じたことから名声が一気に高まり、同年8月の第1回内国勧業博覧会で初めて『堺緞通』と称して出品したところ、鳳紋褒章銅牌を受賞し、海外にも知られるようになりました。そこで、明治11年（1878）に東京尾張町（銀座4丁目）に出張販売所を開設、外国人貿易商を通じアメリカ、フランスへの輸出が始まりました。荘太郎は海外へ積極的に営業を行い、明治17年（1884）アメリカ・ニューオリンズ博覧会［二等賞銀牌］、明治21年（1888）スペイン・バルセロナ博覧会［褒賞銀牌］、明治22年（1889）フランス・パリ博覧会［二等賞銀牌］へ出品するなど、販路の拡大を推し進めました。明治28年（1895）には、輸出の比率が生産量の85％まで伸び、製造戸数3143戸、工場は66を超え、屋内に余裕のある家にはたいてい緞通織機が置かれるなど、堺緞通は大阪屈指の産業となり、荘太郎は“緞通王”と呼ばれました。しかし急激な生産の伸びによる品質の低下が問題視される中、明治30年（1897）に、アメリカ改正関税法によって重税が課され、輸出量は最盛期の3分の1にまで激減してしまいました。荘太郎も大阪府緞通組合の組長として巻き返しを図りましたが、明治34年（1901）、道半ばにして病を患い逝去しました。

注1 天皇が居所から外出すること　注2 天皇がお出ましの時の仮の御殿



堺緞通生産量	天保2年（1831）➡ 120畳	安政8年（1858）➡ 300畳	明治28年（1895）➡ 1,170,000畳

堺緞通の特徴

鍋島緞通、堺緞通、赤穂緞通は、日本三大緞通と言われています。江戸時代、大名の管理下で生産された鍋島緞通と、幕末にはじまった赤穂緞通は、現在にいたるまで当初のスタイルを継承し、伝統工芸品として生産されています。それに対し商人が主導してはじまった堺緞通は、廉価なものから高級品まで、時代や顧客のニーズに応じたものを作り出しました。堺緞通は技術革新もすさまじく、それまでパイル糸をあらかじめ一寸（3.03㎝）にカットして織り、切り揃えていましたが、鋏の形状を変えることで、長い糸のまま織り、カットする方法を編み出し、コスト削減と大幅な時間短縮を成し遂げました。

他にも、緞通の織機は幅一間であったことから、基本は一畳サイズのものしか作れず、大きく使用したい時には、畳のように並べて使用していました。その後明治10年（1877）に荘太郎が幅二間の織機を造り、十畳敷から十二畳敷の製造に成功。翌年には幅四間機を作り、三十二畳から五十畳まで織れるようになりました。

素材も、鍋島や赤穂は木綿以外の材料はほとんど使用しなかったのに対し、堺は木綿の他に麻、羊毛、牛毛、絹など様々な素材の糸が使われ、その多様性は目を見張るものがありました。欧米向けには汚れが付きにくい麻の緞通が好まれ、輸入貨物で使用されていた麻袋をほどき再利用した廉価な製品が多く作られ、特にアメリカ向けの商品の90％以上は麻製のもので占められていました。国内向けの麻製緞通の高級品には、インド・カルカッタ産の麻紡績糸や国内産紡績糸を使用し、彩り鮮やかな製品が作られました。

参考文献　堺市博物館図録『堺緞通ものがたり』平成29年

イラスト：一色 美奈保

その後の堺緞通

明治30年にアメリカの関税が引き上げられた後、堺緞通の輸出量は激減し、国内向け商品が主となりました。大正から昭和のはじめにかけて堺緞通製造業者は、手織りの緞通を製造する一方で、より効率的に製造できるフックドラグ注3等の手織り風の敷物や、効率的に大きな製品が製織可能な、動力織機によるウィルトンカーペットなども並行して作られるようになりました。生産の拠点も織機の大型化に伴い、堺の旧市内から郊外へと移動していきましたが、昭和初期には国会議事堂御便殿前注4の廊下敷に採用されるなど、国内屈指の緞通産地としての名声は、揺らぐことはありませんでした。

戦後、手織り緞通は主に堺市中区を中心として生産されていました。特に深井清水町の辻林峯太郎（1905～1992）は最後の名人と言われ、絵画的デザイン作品で高く評価され、羊毛を素材とし、堺の風物を描きだす美しい作品を数多く制作しました。

現在、堺緞通は「堺式手織緞通技術保存協会」の5名のメンバーを中心に保存伝承が行われ、平成18年（2006）には大阪府の無形民俗文化財に指定され、平成25年（2013）には同協会が文化庁より地域文化功労者として表彰されました。また、平成6年（1994）から大阪刑務所の作業訓練として採用され、多くの作品を制作しています。

注3 フックガンで基布にパイル糸を刺し込んでパイルを形成し、裏面から接着剤を用いてパイル糸を固定した床敷物。　注4 天皇が国会行幸時にお休みになる部屋

堺緞通の大型織機（堺市博物館蔵）

※常設展示コーナーに展示。ただしご覧いただけない期間もありますので詳しくはお問い合わせください。
（堺市博物館072-245-6201）

館長セレクション

第5回
堺緞通の大型織機

館長セレクション
常設展示の逸品

堺手織緞通の実演見学のご案内

毎週月曜日午後2時から4時に、実演が行われています。　※スケジュールが変更となることもございますので、事前にご確認のうえ、お出かけ下さい。
堺市産業振興センター2階　●住所：〒591-8025 大阪府堺市北区長曽根町183番地5　●TEL：072-255-3311

堺 アルフォンス・ミュシャ館 × 堺緞通　クラウドファンディングについて

日本でも大人気の、チェコ出身の芸術家アルフォンス・ミュシャ（1860–1939）。ポスター画家として広く知られていますが、その生涯を通し宝飾品、彫刻、油彩画、商品パッケージのデザインなど、様々なジャンルの作品を生み出しました。

数多くの作品を手掛けたミュシャでしたが、油絵の作品を本格的に手掛けたのは、人生を半ば過ぎた頃でした。パリの有名デザイナーとして数々の商業的な仕事をこなしながらも、満たされない思いを抱いていたミュシャは、明治33年（1900）パリ万国博覧会をきっかけに、新たな方向性を模索し、明治37年（1904）に初めての本格的な大型油彩作品として、縦横2メートルを超える大作《クオ・ヴァディス》を完成させました。それからミュシャは、スラヴ民族の大叙事詩の絵画化構想を抱き、資金集めのため、《クオ・ヴァディス》と共に新天地アメリカへと渡りました。

そして明治43年（1910）頃、アメリカである建築家が新しい絨毯工場を作ろうとしていた際、その最初の図案として《クオ・ヴァディス》を採用したいと考え、ミュシャも制作に賛同しましたが、残念ながら実現には至りませんでした。その後《クオ・ヴァディス》は、長らく行方不明となっていましたが、昭和54年（1979）にシカゴで偶然発見され、ミュシャコレクションを堺市に寄贈した土居君雄氏の手に渡り、その後堺市が所蔵することになりました。

アルフォンス・ミュシャ《クオ・ヴァディス》
1904年　油彩、カンヴァス
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

今回のクラウドファンディングのプロジェクトは、堺が誇る手織り緞通の技術により、ミュシャのもとアメリカで果たされなかった構想を、約110年の時を越えて果たすため、『堺 アルフォンス・ミュシャ館』がプロジェクトを立ち上げ、クラウドファンディングという形で寄付金を募りました。その結果多くの方の賛同を得て、5,221,000円もの寄付が集まりました。そこで早速、堺緞通の技術を継承し、更生作業に取り入れられている大阪刑務所内で、制作が始まりました。

作業はまず、《クオ・ヴァディス》の画像から抽出した色、約100色（計約50キロ）の羊毛糸を泉大津の工場で染め、大阪刑務所内で2名が終日手織り作業に従事していますが、1日に幅1㎝に満たないほどしか進みません。また当初は、約1年～1年半で完成する予定でしたが、刑務所内の新型コロナウイルス感染拡大の影響により、約半年間作業が停止し、完成予定は大幅に遅れることになりました。手織り緞通の作業は、絵の下部分から積み上げるように織っていきますが、2022年12月上旬の時点で、下部装飾枠部分を織り終えたところで、現段階の完成予定は2024年度中旬となっています。詳しくは2次元バーコード（クラウドファンディング）から「新着情報」をご確認ください。

堺の文化資源である「ミュシャ」と「堺緞通」がめぐりあい、新たな歴史が生まれます。特別展「クオ・ヴァディスの謎（仮）」（開催日程未定）では、ほぼ原寸大の「堺緞通」の《クオ・ヴァディス》と、本物の絵画が同時に公開される予定ですので、是非ご期待ください。

READYFOR クラウドファンディング

堺 アルフォンス・ミュシャ館

多才なアルフォンス・ミュシャの、初期から晩年にかけて制作された約500点の作品を所蔵する、ミュシャに特化した世界屈指の美術館です。
●住所：〒590-0014 堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺弐番館2F～4F　●TEL：072-222-5533
●開館時間：午前9時30分～午後5時15分（入場は午後4時30分まで）　●休館日：月曜日（休日の場合は開館）、休日の翌日（翌日が土・日曜日、休日の場合は開館）年末年始
※展示替え等のために臨時休館することがあります。